

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和5年1月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万751トン、前年同月比99.2%、価格は1キログラム当たり260円、同105.1%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5919トン、前年同月比106.1%、価格は1キログラム当たり224円、同100.9%となった。
- 3月の見通しについては、天候不順による出回り不足を背景とする価格高が予想され、燃油高騰による果菜類の出回り不足と相まって、野菜全体の卸売価格を高止まりさせると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、10日に北海道で大雪となった所があった。2日から4日にかけては、北海道を中心に強い寒気の影響を受けたため、旬平均気温は北日本で低かった。東・西日本と沖縄・奄美では平年並だった。期間の中頃は冬型の気圧配置が緩み、西日本や沖縄・奄美では移動性高気圧に覆われる日もあった。このため、北・東・西日本太平洋側、西日本日本海側、沖縄・奄美では晴れた日が多く、旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、沖縄・奄美で多かった。旬間日照時間平年比は東日本太平洋側で122%と、1961年の統計開始以降、2004年と並んで1月上旬として最も多く、西日本太平洋側で143%と、1961年の統計開始以降、1月上旬として最も多かった。北・東日本日本海側では平年並だった。旬降水量は北・東日本太平洋側でかなり少なく、西日本日本海側、西日本太平洋側、沖縄・奄美で少なかった。北日本太平洋側の旬降水量平年比は17%と、1946年の統計開始以降、1月上旬として最も少なかった。北・東日本日本海側では平年並だった。

中旬は、冬型の気圧配置となった日が少なく、寒気の影響を受けにくかった。旬の前半を中心に暖かい空気に覆われ、旬平均気温は北・東・

西日本でかなり高く、沖縄・奄美で高かった。旬平均気温平年差は、東日本で+2.7度と、1946年の統計開始以降、1月中旬として最も高かった。北・東日本日本海側と沖縄・奄美では、高気圧に覆われて晴れた日があったため、旬降水量は北日本日本海側でかなり少なく、旬間日照時間は北・東日本日本海側でかなり多かった。一方、北・東日本太平洋側と西日本では気圧の谷の影響を受けやすく、曇りや雨または雪の日が多かった。旬降水量は西日本日本海側でかなり多かった。東日本日本海側と沖縄・奄美で少なかった。西日本太平洋側で多く、北・東日本太平洋側では平年並だった。旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なかった。

下旬は、低気圧が日本海と本州南岸付近をたびたび通過し、低気圧の通過後は冬型の気圧配置となった。このため、旬降水量は北・東・西日本日本海側で多かった。旬間日照時間は、北日本日本海側と東日本太平洋側で少なかったが、北日本太平洋側で多かった。一方、北・東日本太平洋側では、まとまった雨または雪とならなかったため、旬降水量は少なかった。旬の中頃は冬型の気圧配置が強まり、強い寒気の影響を受けたため、全国的に気温が平年を大きく下回り、旬平均気温は北・東・西日本でかなり低く、沖縄・奄美で低かった。また、日本海側

を中心に太平洋側の一部でも、交通機関などに影響が出るような大雪となった所があり、旬降雪量は西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多かった。旬降水量は、西日本太平洋側では

平年並だった。旬間日照時間は、東・西日本日本海側と西日本太平洋側では平年並だった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は以下の通り（図1）。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
東日本				日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側
西日本						日本海側 太平洋側			

資料：気象庁「1月の天候」



(2) 東京都中央卸売市場

1月の東京都中央卸売市場における野菜の入

荷量は11万751トン、前年同月比99.2%、価格は1キログラム当たり260円、同105.1%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（1月速報）

品 目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,751	99.2	97.4	260	105.1	100.9	294	241	255
だいこん	10,281	99.7	97.9	99	129.5	101.3	111	81	105
にんじん	6,604	100.7	100.7	115	115.7	92.2	127	111	113
はくさい	13,089	94.2	92.8	53	136.6	83.7	47	45	65
キャベツ類	13,560	90.4	99.9	98	124.7	93.3	111	97	92
ほうれんそう	1,555	121.3	115.4	567	95.2	93.2	699	516	525
ねぎ	5,483	108.2	110.4	264	103.1	84.7	342	227	248
レタス類	6,501	108.6	103.3	264	96.2	97.0	319	248	234
きゅうり	4,154	90.1	91.7	509	136.1	112.1	492	420	623
なす	1,432	90.4	93.2	451	111.9	100.1	357	410	604
トマト	5,064	97.1	90.9	351	103.6	104.3	352	338	366
ピーマン	1,479	89.3	101.3	744	137.8	114.3	731	700	801
さといも	514	99.2	96.6	312	112.5	96.7	313	309	315
ばれいしょ	6,909	109.6	94.5	134	55.8	90.2	131	134	137
たまねぎ	8,722	109.3	100.8	127	66.7	102.3	120	121	136

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、中旬にやや落ち着いたものの、下旬に再度上げ、安めに推移した前年を3割弱上回り、平年をわずかに上回った(図2)。

葉茎菜類は、キャベツの価格が、安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をかなりの程度下回った(図3)。

果菜類は、ピーマンの価格が、不足感から月

間を通して堅調に推移し、安めに推移した前年を4割近く上回り、平年を1割以上上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が、大幅に高めに推移した前年を3割以上下回り、平年をわずかに上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

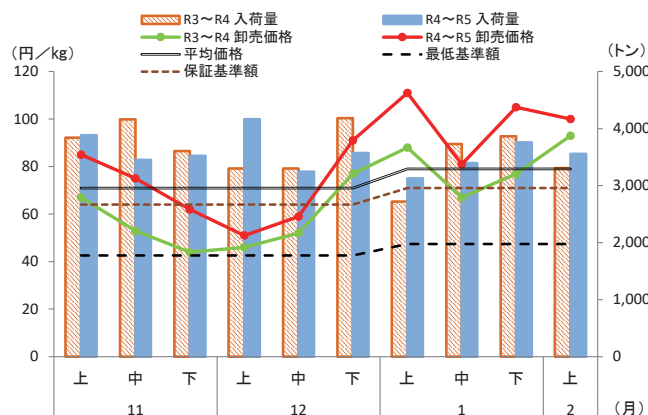


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

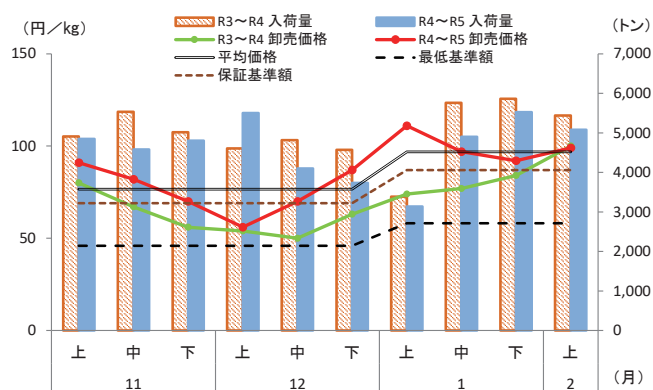


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

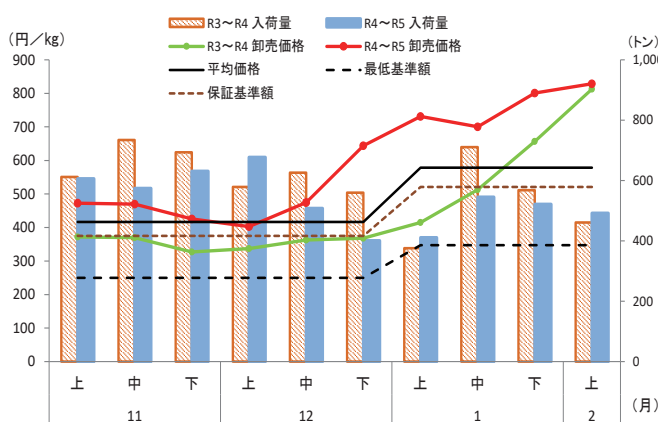
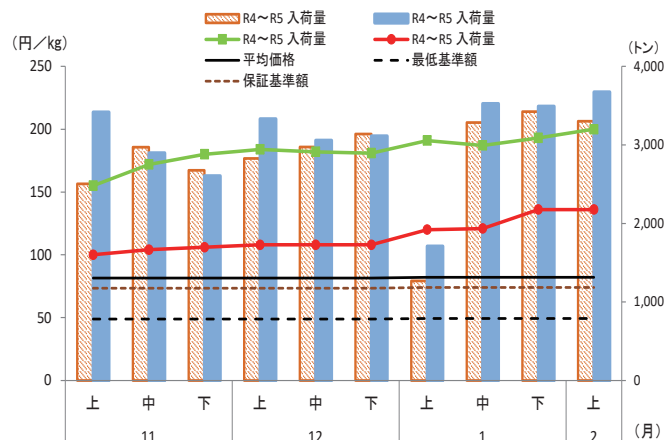


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	千葉産、神奈川産中心の入荷となった。千葉産の作付面積は前年並みで、やや前進傾向にあった生育は、12月以降の低温で前年並みに戻っている。神奈川産の作付面積は前年をやや下回り、12月下旬以降の低温と干ばつが続いていることにより生育が停滞している。また乾燥に加え、強風による葉の傷みや病害、根部障害が散見される。総入荷量は少なかった前年並みで、平年をわずかに下回った。 価格は中旬にやや落ち着いたものの、下旬に再度上げ、安めに推移した前年を3割弱上回り、平年をわずかに上回った。
	にんじん 	千葉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、出荷のピークは過ぎたものの、生育肥大期の気温上昇と適度な降雨で肥大は良好。その後の干ばつの影響は少ない。総入荷量は前年並みであった前年をわずかに上回った。 価格は月間を通して堅調に推移し、安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をかなりの程度下回った。
葉茎菜類	はくさい 	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みから一部減少し、11月の高温でアブラムシの発生が散見されたが、おおむね順調。価格の低迷と労働力不足から、出荷と管理意欲の減退がやや見られた。総入荷量は前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 下旬に向け価格を上げ、大幅に安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を2割近く下回った。
	キャベツ類 	愛知産を中心に千葉産の入荷となった。愛知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、やや干ばつ傾向で遅延が散見された。千葉産の作付面積は前年並みで、生育は前進傾向であったが、12月以降の低温で前年並みに戻っており、病虫害は少ない。総入荷量はやや多かった前年を1割弱下回り、前年並みとなった。 価格は安めに推移した前年を2割以上上回り、平年をかなりの程度下回った。
	ほうれんそう 	群馬産、茨城産を中心とした関東産の入荷となった。各産地の作付面積は前年並みで、昨秋以降の気温高から前進傾向であったが、12月以降の低温・少雨で生育は停滞した。ハウスものは順調であるが、露地ものの生育は停滞気味。総入荷量はやや少なめに推移した前年を2割以上上回り、平年を1割以上上回った。 価格は中旬以降落ち着きを見せたものの、露地ものの比率が低い横ばいが続き、前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ねぎ 	千葉産、茨城産、埼玉産など、関東産の秋冬もの中心の入荷となった。各産地の作付面積は前年並みだが、茨城産は前年をやや上回る。11月の温暖な気候により前進傾向で、12月以降の低温でやや落ち着いたものの、依然としてやや進んでいる。低温・干ばつによる正品率の低下が見られ、一部病虫害の発生が散見されたものの、太りも良く作柄は良好であった。総入荷量は前年を1割近く上回り、平年を1割強上回った。 価格は中旬以降降雨もなく、切れ目のない潤沢な入荷となり、安めに推移した前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。
	レタス類 	静岡産を中心に長崎産、香川産などの入荷があった。作付面積は前年並みで、1月中旬まではやや干ばつ傾向も、気温が比較的高めに推移したことから、停滞していた生育は前年並みまで回復した。長崎産の作付面積は前年並みで、低温干ばつにより若干の生育遅延が見られた。香川産の作付面積は前年をやや下回り、12月以降の夜温の低下により生育停滞気味であったが、日中の気温が比較的高めに推移したことから、3～4日程度の前進傾向であった。総入荷量は少なめに推移した前年を1割近く上回り、平年をやや上回った。 価格は中旬以降落ち着きを見せ、前年、平年ともやや下回った。

果菜類	きゅうり 	宮崎産を中心に高知産、千葉産などの入荷となった。宮崎産の作付面積は前年並みで、低温の影響はあったものの、生育はおおむね順調。高知産の作付面積は前年並みで、生育は順調もやや徒長傾向であった。12月下旬の寒波により草勢の低下、肥大の遅れがみられる。千葉産の作付面積は前年並みで、年内の曇天、日照不足により生育が遅延していたが、天候の好転に伴い回復した。総入荷量は燃油高により全体的に施設の設定温度が低い傾向があり、前年並みであった前年を1割ほど下回った。 価格は特売需要などで下旬に高騰し、安めに推移した前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。
	なす 	高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であったがコナジラミ、アザミウマなどの虫害やうどん粉病、黒枯病の発生がわずかに散見された。総入荷量は燃油高により施設の設定温度が低い傾向があり、やや多かった前年を1割弱下回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は不足感の出た下旬に高騰し、やや安めに推移した前年を1割以上上回り、前年並みとなった。
	トマト 	熊本産を中心に栃木産、愛知産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれて生育は順調であった。一部病害が散見されたものの、発生は前年より少なく出荷量に影響はない。栃木産の作付面積は前年並みで、8月下旬に定植したものと促成栽培ものともに生育はおおむね順調。一部で葉かび病、灰色かび病、黄化葉巻病の発生が散見されるも軽微である。愛知産の作付面積は前年並みで、生育は順調も低温により着色が遅延。総入荷量は燃油高や資材の高騰などの影響もあり、少なめに推移した前年をわずかに下回り、平年を1割近く下回った。 価格は月間を通してあまり大きな動きはなく、若干安めに推移した前年をやや上回り、平年をやや上回った。
	ピーマン 	宮崎産を中心に高知産、鹿児島産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調。高知産の作付面積は前年並みで、病虫害の発生は平年に比べ少なく、生育はおおむね順調。鹿児島産の作付面積は前年並みで、やや低温の影響があるものの生育はおおむね順調。総入荷量は燃油高により施設の設定温度が低い傾向もあって伸び悩み、多かった前年を1割強下回り、平年をわずかに上回った。 価格は不足感から月間を通して堅調に推移し、安めに推移した前年を4割近く上回り、平年を1割以上上回った。
土物類	さといも 	埼玉産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、8月の適度な降雨と天候に恵まれ、生育はおおむね順調で大玉傾向。年内出荷の比率が上昇している傾向もあり、数量はやや落ち着いている。中国産の輸入は前年を2割以上下回った。総入荷量はやや少なかった前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は安めに推移した前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。
	ばれいしょ 	北海道産を中心に長崎産、鹿児島産の入荷となった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵ものの出荷となった。夏場の豪雨の影響により正品率が低く、やや歩留まりが悪い。長崎産の作付面積は前年並みで、降雨が少なくやや小玉傾向も品質はおおむね良好。乾燥による病害が散見された。鹿児島産の作付面積は前年並みで、降雨による定植遅れに加え、多湿により一部病害が散見された。突風による風害も発生している。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年をやや下回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を4割以上下回り、平年を1割近く下回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、収穫は終了し貯蔵ものからの出荷となった。豪雨の影響を受けた地域はあるものの、全体としては作柄良好で肥大も良い。中国産の輸入は前年の4分の1強となっている。総入荷量は少なかった前年を1割近く上回り、平年をわずかに上回った。 価格は大幅に高めに推移した前年を3割以上下回り、平年をわずかに上回った。

(執筆：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

1月の大阪市中央卸売市場における野菜の入荷量は3万5919トン、前年同月比106.1%、

価格は1キログラム当たり224円、同100.9%となった(表3)。
品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(1月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,919	106.1	104.8	224	100.9	100.1	256	209	221
だいこん	3,317	96.9	101.1	78	121.9	99.4	95	67	79
にんじん	2,322	102.7	105.5	119	148.8	106.5	132	114	118
はくさい	4,993	106.8	117.7	63	123.5	89.3	61	54	72
キャベツ類	4,403	100.7	106.8	91	119.7	97.6	101	90	87
ほうれんそう	454	96.3	101.4	558	107.9	94.0	698	513	515
ねぎ	1,249	109.9	119.1	393	107.1	90.7	492	341	381
レタス類	947	110.3	100.8	261	97.8	101.1	326	253	237
きゅうり	1,146	105.8	114.8	465	130.6	110.6	423	393	582
なす	407	97.2	113.4	424	109.6	102.2	347	382	567
トマト	1,426	101.2	104.4	340	103.7	104.0	340	334	345
ピーマン	343	101.6	104.7	717	141.4	117.3	696	693	759
さといも	123	114.9	96.8	303	107.8	96.7	321	307	289
ばれいしょ	2,981	120.4	109.7	125	53.6	87.5	123	122	131
たまねぎ	4,987	152.4	123.7	119	60.1	100.3	120	119	119

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年比は過去5カ年平均との比較。
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	1月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	鹿児島産、和歌山産、徳島産が主体となり長崎産などの入荷もあった。上旬は比較的安定した入荷であったが、中旬以降の全国的な冷え込みから、各産地とも下旬に入荷量が急減した。全旬とも入荷量は前年に及ばず、月間全体では前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 価格は上旬から中旬にかけて順調な入荷増が予想されて下落したが、月の後半の急な冷え込みから、下旬には再び上昇し、月間では前年を大幅に上回り、平年をわずかに下回った。
	にんじん 	鹿児島産と長崎産が主体となる入荷であった。各産地とも太物中心で入荷量は多く、上中旬は順調な入荷が続いたが、月の後半の冷え込みから中下旬に減少となった地域もあった。鹿児島産は月間で前年をかなり上回る入荷量となったが、長崎産は前年を若干下回った。月間全体では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は中旬に下落して下旬に回復傾向となった。主産地は極端な安値だった前年を大きく上回った。全体では前年を5割近く上回り、平年をかなりの程度上回った。

葉茎菜類	はくさい 	茨城産を中心に、後続の愛知産や兵庫産、鹿児島産などの九州産地の入荷もあった。九州産の入荷が少ない中で茨城産は順調な入荷を続けた。前年の干ばつの影響は回復し、旬を追うごとに順調に入荷増量となった。下旬は全国的な寒波の影響により九州でも降雪があり、入荷量は急減した。月間全体では前年をかなりの程度上回り、平年を大幅に上回った。 価格は、上旬から中旬にかけての順調な入荷増量とともに旬ごとに下落傾向であった。上旬は比較的気温が高かったことによる需要の伸び悩みで販売も苦戦したが、下旬の入荷減少と急な冷え込みから需要が高まったことで上昇した。月間では安値だった前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度下回った。
	キャベツ類 	寒玉キャベツは愛知産を中心として大阪産や長崎産などの入荷があった。春キャベツも愛知産を中心に兵庫産などの入荷があった。どちらも上旬は比較的安定していたが、中旬以降の寒波の影響により旬を追うごとに入荷は不安定となり、下旬には降雪もあり多くの地域で減少した。月間では旬を追うごとに微増して前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は旬を追うごとに下落傾向ではあるものの、入荷が不安定な中で高値推移となり、月間では前年を大幅に上回り、平年をわずかに下回った。
	ほうれんそう 	徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。各産地とも旬を追うごとに増量傾向であったが、中旬以降の寒波による気温低下から生育不良となり、入荷量は伸び悩んだ。月間では徳島産は前年並みであったが、福岡産は前年を大幅に下回り、全体でも前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 入荷量が伸び悩む中でも需要は伸びず、荷動きが悪いことから価格は中旬に落ち込んだまま横ばいとなった。安値だった前年をかなりの程度上回り、平年をかなりの程度下回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	群馬産を中心に鳥取産や埼玉産などの入荷があった。各産地とも順調な出荷を続け、全体でも旬を追うごとに増量となった。下旬に降雪の影響で減少した地域もあったが、月間では前年並みとなった。 特売も含めた需要があり、中旬以降の冷え込みにより引き合いが強まったことから、中旬に一旦下落した価格が下旬に再び上昇した。月間では前年をかなりの程度上回った。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは徳島産が中心、細ねぎは高知産が中心で、どちらも他産地からの入荷もあった。旬を追うごとに増量となるも、中旬以降の寒波の影響による気温低下から生育不良となり、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年を大幅に下回った。 価格は入荷増量傾向から中旬に下落したが、寒波の影響による不安定な入荷から下旬には再び上昇した。月間では前年を大きく上回った。
	レタス類 	ラップものは徳島産、兵庫産、香川産が主体となり、裸ものは長崎産が主体となる入荷であった。上中旬は安定した入荷となったが、中旬以降の寒波の影響により下旬は減少した。サニーレタスとリーフレタスは福岡産が中心となり、レタス同様に中旬以降の冷え込みから入荷量が減少したが、少なかった前年は上回った。レタス類全体では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。 価格は上中旬の安定した入荷を受けて旬を追うごとに下落の推移となった。月末に回復傾向となるも月間では前年をわずかに下回り、平年をわずかに上回った。

果菜類	きゅうり 	宮崎産が主体となり、高知産や徳島産の入荷もあった。上旬から中旬にかけては順調に増量するかと思われたが、中旬以降の寒波の影響により着花が少なく、実の肥大も進まずに出荷量が減少し、下旬にも減少した。月間全体では前年をやや上回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は上旬から中旬にかけては下落傾向であったが、絶対量不足から下旬に高騰した。月間では前年を3割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。
	なす 	千両系は高知産、長茄子は福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。前年末からの入荷量の伸び悩みによる年始の溜まりも少ない中で、中旬以降の寒波の影響により下旬に減量した。月間全体では前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく上回った。 価格は前月までは販売不振により伸び悩んでいたが、年明けから入荷量が少ない中で旬を追うごとに上伸を続け、下旬には絶対量不足から高騰した。月間では前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。
	トマト 	愛知産と熊本産が主体となり、福岡産の入荷もあった。前月までの着色遅れが1月にずれ込み増量した。各産地とも旬を追うごとに増量となり、愛知産は月間で前年を若干上回り、熊本産は黄化葉巻病の発生で少なかった前年を大きく上回った。月間全体でも前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は安定した推移となり、月間全体では前年、平年ともやや上回った。
	ピーマン 	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。宮崎産は新規系統産地の入荷もあって増量したものの、中旬以降の寒波の影響により各産地とも下旬の入荷量は少なく、月間では前年をわずかに上回り、平年をやや上回った。 価格は契約価格などもあり、高値推移の中で下旬には不足感から急伸した。月間では前年を4割以上上回り、平年を大幅に上回った。
土物類	さといも 	愛媛産を中心に山形産などの入荷もあった。寒波の影響により下旬に激減した。輸入の中国産の入荷もあったが現地価格が高く、入荷量は前年の3分の1程度であった。月間全体では少なかった前年をかなり大きく上回り、平年をやや下回った。 年明けからは荷動きが鈍く、価格は旬を追うごとに下落傾向となった。月間では安値だった前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。
	ばれいしょ 	丸芋は北海道産を中心に新物の鹿児島産や長崎産の入荷もあった。北海道産は中旬以降の各地の大雪の影響により入荷が不安定となったが、月間では前年を大きく上回った。鹿児島産は雨の影響により出荷が伸び悩み、長崎産は寒波の影響により下旬に減少した。メークインも北海道産が中心となり、雪の影響はあったものの、潤沢な入荷が続いた。ばれいしょ全体では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は長期間売れ行き不振が続き、入荷も多かったことから、高値だった前年を4割以上下回り、平年をかなり大きく下回った。
	たまねぎ 	北海道産を中心に兵庫産の入荷もあった。北海道産は上旬から中旬にかけて順調であったが、中旬以降の寒波の影響により下旬には各地で大雪となり、輸送が乱れたことで入荷不安定となった。しかし産地残量が多かったことで月間の入荷量は前年を大きく上回った。月間全体でも前年を5割以上上回り、平年を大幅に上回った。 価格は長期間続く安値の影響が残り、全旬を通じて横ばい状態であった。高かった前年を4割近く下回り、平年並みとなった。

(執筆：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした3月の見通し

1月下旬に到来した「10年に1度」の寒波は西日本に大雪をもたらし、特に鹿児島県産の豆野菜に大きな影響が出ているが、その他は多少の遅れが生じる程度で特別問題化していない。全国的に長く干ばつが続いており、3～4月まで遅れとなって影響を及ぼしてくると予想

している。年度末のイベントの時期だが、かつてのような盛大な会合は鳴りを潜めると予想している。抑えられた需要からは、コロナ禍前のような業務用需要は見込めず、野菜の大幅高はないであろう。ただ、天候不順による出回り不足を背景とする価格高は予想され、燃油高騰による果菜類の出回り不足と相まって、野菜全体の卸売価格を高止まりさせると予想される。

根菜類



だいこんは、千葉産の露地ものは、寒波による葉の傷みなどの影響でやや小ぶりの仕上がりである。露地ものは2月中旬までで、2月10日頃からトンネルものの春だいこんになると予想される。寒さの影響はなく生育順調である。肥大も順調で、L・2Lサイズが90%を占める見込みである。ピークは4月上旬までと予想される。神奈川産は干ばつと寒波でコブラ症(根部の下部分のつぶれ)の発生が見られ、出荷は減少している。2月に入って春ものに切り換わり、やや減少気味で推移すると予想され、3月には通常の出荷に戻ると予想している。大分産は1月下旬の寒波でやや生育が停滞した。そのため若干小振りと予想されるが、2月の暖かさで回復を予想している。3月としては例年通りの見込みである。徳島産の作付面積は減っているが、3月いっぱいには平年並みに出荷できると予想される。寒波の影響は特別なく、4月の春ものにつないでいく。

にんじんは、千葉産は2～3月は秋冬ものの最終となり、^{はしゆ}播種期の降雨の影響により全般に遅れて不作の年であるが、Lサイズ中心のMと肥大は問題ない。3月に入り、減りながら推移し、ほぼ3月いっぱい切り上がると予想している。徳島産は3月中旬に近隣市場へのお荷が始まるが、東京へは3月20日頃から週2ペースでの販売を予想している。現状は干ばつ気味で、Lサイズ中心のやや小ぶりの仕上がりである。ピークは3月下旬から4月10日頃まで。



葉茎菜類

キャベツは、愛知産は2月の初めまでは干ばつで出荷が少なかったが、現在は8玉サイズ中心に増えてきている。引き続き寒波の影響もあって6玉サイズが少ない小玉に仕上がり、3月までは横ばいで推移すると予想される。3月としては例年並みの出荷と予想される。千葉産は2月初めの段階では小ぶりの物が多くなっており、干ばつの影響で伸び悩んでいる。2～3月

は例年並みの大きさになって、量的にも前年並みの出荷と予想される。3月中旬から4月前半は出荷の谷間ができるが、中旬から再び増えてくると予想される。神奈川産は今シーズン、だいこんの作業を早めに切り上げてキャベツに注力する流れがある。生育は問題なく順調である。2月いっぱい寒玉で、3月後半から春系に切り換わってくると予想される。

はくさいは、茨城産は2月に入りレタスの作業が忙しく、はくさいはかなり少なくなると予想される。春ものが4月中旬から始まるため、3月後半は出荷の谷間になる見込みである。兵庫産の現状は収穫しながらの出荷で、3月には冷蔵ものの販売となると予想される。12月の干ばつと冷え込みで生育が遅れており、若干小玉傾向で4玉サイズが中心ではあるが、6玉も多くなっている。3月いっぱいのお荷で、ほぼ前年並みの出荷を予想している。

ほうれんそうは、群馬産の現状は前年のクリスマス寒波の影響で遅れている。寒さが厳しく、半分が露地作となっているため、生育に時間がかかっている。3月は回復傾向から平年並みを予想しており、3月中旬から徐々に少なくなってくると予想している。

ねぎは、茨城産に寒波はあったが積雪はなく^{ほじょう}圃場は乾いている。秋冬ものの生育は順調に推移している。3月に入って春ものとなり、例年並みの出荷と予想される。千葉産の秋冬ものの生育は順調で、3月いっぱい例年より多く出荷できると予想している。4月には春ものとなり、3月よりも減ってくると予想される。埼玉産の秋冬ものは3月いっぱいのお荷で、4月には春ねぎとなる。12月にピークが来てその後は減っているが、3月は問題なく例年並みの出荷と予想される。

レタスは、茨城産の現状は早い生産者の出荷が始まっており、2月下旬からトンネルもののピークになると予想される。干ばつと低温により生育は平年より遅れている。3月の降雨があれば本格的に増えて来ると予想している。静岡産の現状は平年並みの出荷が続いており、寒波の影響はない。引き続き2～3月も徐々に減りながらではあるが平年並みを予想している。2Lサイズ中心で、4月上旬に切り上がると予想している。

果菜類



きゅうりは、群馬産の現状は寒波の影響により生育が遅れて少なめの出荷となっている。2月後半には徐々に増えて、3月10日にはピークと予想される。出足は遅れたが、3月は平年並みに出荷できると予想している。埼玉産は2月下旬から出荷が始まるが、例年並みかやや遅い。作付けは前年並みであり、当面のピークは4月10日前後に来て、次の大きなピークが5月の大型連休頃になると予想している。宮崎産は寒波による被害が一部あったが大きな落ち込みはなく、2月に入って問題なく出荷が続いている。花も付いており、好天が続けば3月も問題なく出荷できると予想している。

なすは、高知産の現状は少なめの出荷となっているが、寒波の他に新しい品種が導入されたことも理由の一つである。今のところ2月中旬には増えて来ると予想しているが、気温次第である。樹勢そのものは降雪があっても問題なく、日長となる3月には例年並みに追いついて来ると予想される。福岡産の現状は11月に大幅に多くなった反動や、1月下旬の寒波もあり、出荷は減っている。2月に入り徐々に回復に向かい、3月は前年並みの出荷が予想される。樹勢は問題なく、天候次第である。

トマトは、熊本産は寒波による直接の被害は報告されていないが、冷え込みから出荷は減っている。2月末頃には回復し、3月は例年並みの出荷が予想される。栃木産の冬春ものは生育順調である。寒波の影響はないが、燃油の高騰が心配材料である。3～4月は現状よりも増えて、ほぼ平年並みの出荷が予想される。桃太郎系で、M、Lサイズ中心と予想される。愛知産の現状は寒波の影響により少なめで、減少気味に推移すると予想される。2月は横ばいで推移し、3月には再び増えてくると予想される。5月が最大のピークと予想している。

ピーマンは、宮崎産の現状は1月下旬の寒波の影響により少なくなっているが、2月末頃には回復してくると予想している。3月中旬から田植えが始まり、作業時間の減少により急増はなく、前年並みの出荷を予想している。菜種梅雨の動向にもよるが、晴天が続くと出荷は伸び

ると予想される。高知産の冬春ものは6月までであり、全体のピークは5月と予想している。寒波については加温で問題なく、3月も前年並みの出荷を維持できると予想している。茨城産の3月は春ものの出始めである。促成ものからの切り換わりで作付けは増えているが、寒波の影響により例年より時間がかかっている。5～6月がピークで、3月は良くても前年並みの見込みである。



土物類

さといもは、埼玉産の現状は伏せ込みもの（貯蔵もの）の出荷だが、3月中旬には種芋の選抜も始まり出荷はさらに減ると予想される。豊作であった前年を下回ると予想している。

ばれいしょは、鹿児島産（いずみ）の早春ものは2月上旬にピークが来て、3月の初め頃までと予想される。その後の春ものは4月中旬から。1月下旬の寒波による積雪で作業が遅れたが、2月に入り解消した。作柄は寒波の影響なく、平年並みの出荷が予想される。同産（徳之島）の現状は2週間の遅れで、1月下旬の寒波のほか、植え付けが遅れた影響もある。ピークは2月末頃から3月上旬の見込みである。出荷は4月いっぱい続くが、やや減収の可能性もある。赤土新ばれいしょの品種は「ニシユタカ」でLサイズ中心の見込み。

たまねぎは、佐賀産の現状は走りものが始まり、本格的には3月末頃からと予想される。3月は極早生、早生は4月に入ってからと予想される。定植時期の天候に恵まれ、病気の発生もなく生育順調であり、作付けも例年より拡大している。静岡産は今シーズン前半の気温が低く、定植時の降雨も影響し、出荷のペースが鈍く、その分後ろにずれている。3月中旬にほとんど終了するが、前年よりも収量減と予想している。熊本産の「サラタマちゃん」は3月末から4月がピークとなるが、寒波影響もなく生育は順調である。



その他

ブロッコリー

埼玉産の秋冬ものは前年11月に前進した影

響により現状は少なく、2月後半から3月前半は出荷の谷間になると予想される。春ものは3月下旬から始まると予想され、生育は順調である。愛知産は前進した影響により2月に入って減ってきている。中旬に再び増えて、3月には平年並みの出荷になると予想している。春ものは4月に入ってからと予想される。

カリフラワー

福岡産は1月に最大のピークとなったが、3月にもう一度ピークが来ると予想される。1月下旬の寒波による降雪と強風の影響により、若干少なくなる時期があると予想される。4月にはさらに少なくなると予想される。

セルリー

静岡産は寒波の影響は特別なく、生育は順調である。1月がピークで3月は例年少なくなり、4月にもう一回ピークが来るが、3月としては前年並みの見込みである。

アスパラガス

佐賀産の現状は寒波の影響により計画ほど増えていない。気候が和らぐと2月中旬頃から一気に始まると予想される。3月にはピークを迎えると予想しているが、株の充実の度合いからすると前年を上回ると予想している。

にら

茨城産は年明けから新株の出荷となっており、3月はこのまま寒波が強い状態が続いた場合、例年を下回ると予想している。

ごぼう

熊本産は12月末から1月初めに1回目のピークが来て、3月に入って2回目のピークを迎えると予想される。1月下旬の寒波も品質に問題なく、今後雨が少なければ順調に作業できるであろう。秋冬ものの作付けは増えており、量は前年より増えると予想している。

かぼちゃ

沖縄産は11~12月の曇天、さらに1月の寒波で作柄が悪い。出荷のピークは3月後半から4月上旬と予想している。品種は「えびす」「栗五郎」である。例年は4月いっぱいの出荷となるが、今年は遅れて5月まで出荷され、量的には前年の8割程度と予想している。

かんしょ

徳島産の22年産は平年作で、やや少なめであった21年産を上回っているため、3月前年

を上回ると予想される。2月に入り23年産の定植作業が始まるため、徐々に減りながら推移すると予想される。茨城産は8月まで貯蔵ものを販売する。22年産は豊作で、引き続き前年を上回る出荷と予想される。品種は「べにまさり」中心で、3月中旬まで量的にまとまっているが、その後はかなり減ってくると予想される。

豆野菜

静岡産のえだまめは周年出荷しているが、3月から徐々に増えて4~6月がピークと予想される。鹿児島産（いずみ）は積雪で凍結した影響により、主要のそらまめが3月は大幅に遅れて少なく、4月中旬頃からと予想している。グリーンピースは3月に出荷できるのはごく一部で、スナップえんどうも少ないと予想している。同産（指宿）は1月24~25日の寒波で氷点下となり、莢が凍るなどの被害があった。木が枯死するケースも見られている。2月の出荷はゼロに近く、主要のそらまめは3月下旬から4月上旬に出荷されると予想される。グリーンピースは3月上中旬に出荷されるが、かなり少なくなる見込みである。スナップえんどうは2月下旬に若干回復し、3月中旬までとなり、ピークはないと予想される。沖縄産のさやいんげんは12月から始まり、3月にピークを迎えると予想される。作柄は例年より悪く、12~翌1月も少なかったが、3月にはある程度回復を期待している。

たけのこ

静岡産は3月上旬から始まり、今年は裏年で前年の60~70%と予想している。ピークは例年と同様に4月上旬で、4月いっぱい切り上がると予想される。

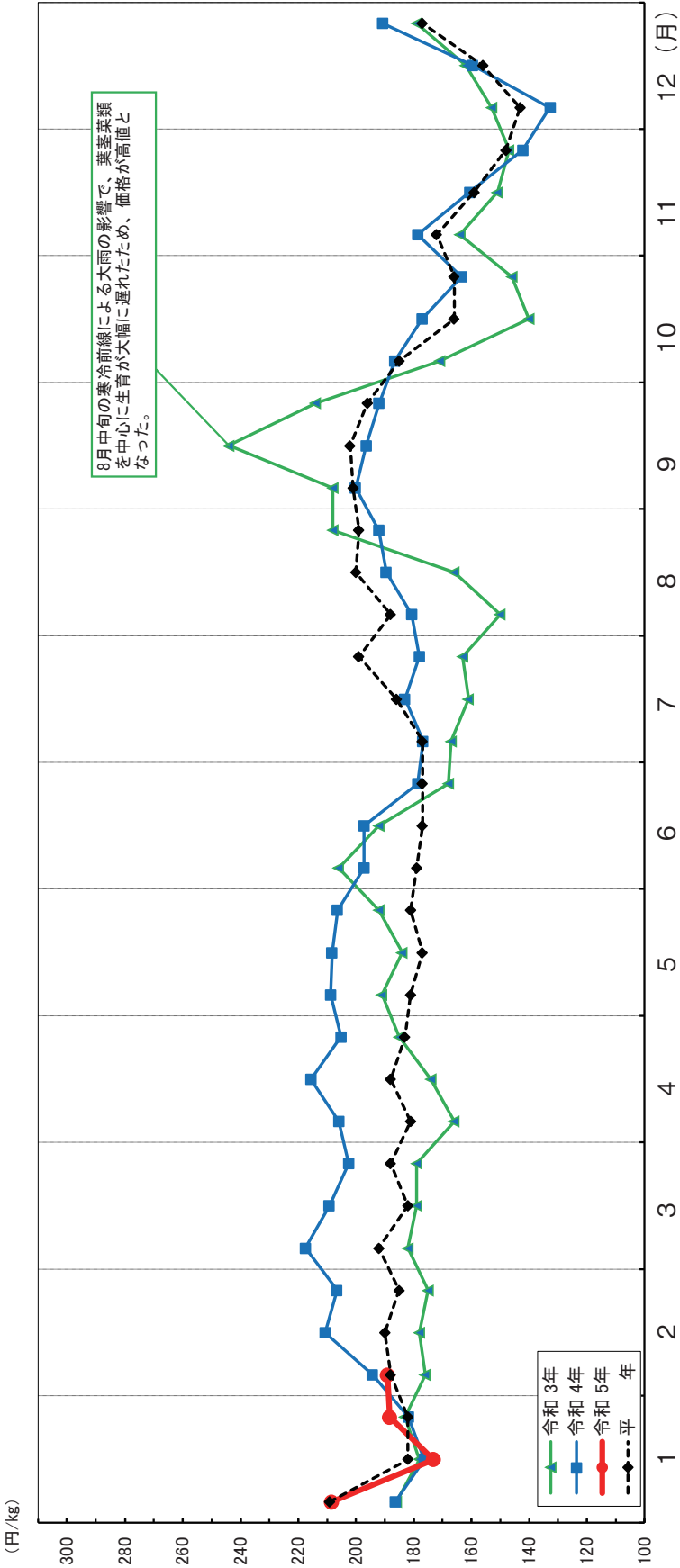
菜の花

千葉産は1月下旬の寒波による圃場の凍結などにより、出荷は例年を下回ると予想される。現状では3月にどこまで立て直しできるか予測はできない。福岡産は昨年10月から始まり、4月までの計画である。作付けは生産者の高齢化などで減り続けている。1月は寒波の影響により減少したが、2~3月は平年に近い水準まで回復すると予想される。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

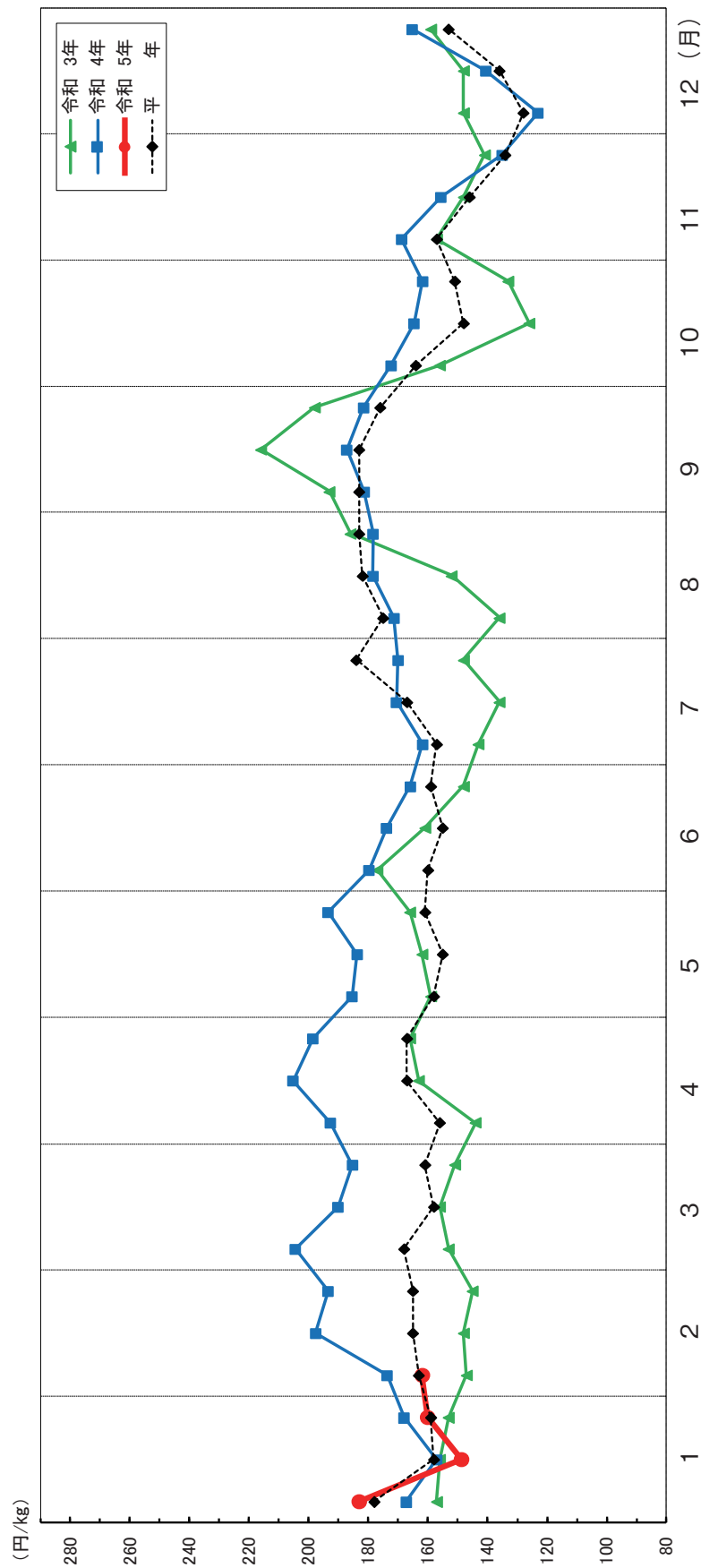


	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬												
令和3年	186	178	183	176	178	175	182	179	179	166	174	185	191	184	192	206	192	168	167	161	163	150	166	208	244	214	171	140	146	164	151	147	153	162	179	
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191
令和5年	208	173	188	189																																
平 年	209	182	182	188	190	185	192	182	188	181	188	183	181	177	181	179	177	177	186	199	188	200	199	201	202	196	185	166	166	172	159	148	143	156	177	

(単位：円／kg)

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。
注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬										
令和3年	157	156	153	147	148	145	153	156	151	144	163	166	159	162	166	177	161	148	143	136	148	136	152	186	193	216	198	156	126	133	157	148	141	148	148	159
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162																																
平 年	178	158	159	163	165	165	168	158	161	156	167	167	158	155	161	160	155	159	157	167	184	175	182	183	183	183	176	164	148	151	157	146	134	128	136	153

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年とは、過去5カ年（平成29年～令和3年）の旬別価格の平均値である。
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。